4 喜蔵堤（きぞうづつみ）

ゴッゴーッ！ゆらゆらっと教室が揺れる！「じ、地震だー！」すぐに机の下にもぐった。「まだ続いているよ。どうしたんだぁ。」恐怖感がわく。聡（さとし）は小学校の卒業証書授与式を控えた三月十一日の帰りの会の時に大地震にあった。東日本大震災である。震源地付近の東北では、大津波発生と原発事故が重なり、未曽有（みぞう）の状況であった。

「お母さん、あれ見て！去年の夏休みに行った所が……。」

「あの辺りでおみやげを買ったりしたよね！あんなきれいな街が。信じられない……。」

テレビでは、家が破壊されたり、家族を失ったりした人々の悲しみが次々と報道されていた。また、地域の人が自分のできることからみんなの役立つ医療活動や炊き出しやガレキの撤去などに立ち上がる姿も報道されていた。（自分のことでさえ大変なのに。）美しかった街のすさまじい変わりようや人々の姿に聡は、くぎ付けになった。（こんな時、自分だったらどんなふうに考えるだろう。）

その一ヶ月後、聡は中学校に入学した。そこは、大落古利根川（おおおとしふるとねがわ）のほとりに校舎が並行して建っており、川の土手沿いの小道は、桜並木となっていて花見の人が多く訪れている。日頃も多くの人が散歩やランニングをして愛用している。聡が入部したサッカー部もこの小道を中心に毎日ランニングして使っていた。

桜が見ごろとなった休日の翌朝、いつものように土手の小道をランニングしていると、花見に来た人が捨てたと思われる食品が入った容器や割りばし、空き缶が転がっていた。（汚いなあ。ゴミぐらい自分で持ち帰ればいいのに。）ゴミが置き去りになっているのを見て、聡は思った。

顧問の先生からの提案で、今日と明日の二日間、土手沿いの小道のゴミ拾いを行うことになった。サッカー部の全員で、土手の小道に沿ってゴミ拾いが始まった。空き缶を拾うと、中身がこぼれて新しいジャージを汚してしまった。

「うわー、汚い！これ、酒だよー。」

聡は、（サッカー部なのになんでゴミ拾いボランティアをするのだろうか。せっかく入部したのだから、ボールで練習したいな。）と思っていた。しかし先生をはじめ、先輩やみんながゴミ拾いを始めたので、聡はしぶしぶくっついて行った。

その日の音楽の授業のことである。先生は、

「今日の授業は、校歌について勉強します。校歌はその学校の生徒の一番身近な歌です。歌詞には、この学校にちなんだ言葉が書かれていて、こういう生徒に育ってほしいという願いや進むべき道が示されてできています。本校の校歌の歌詞に『喜蔵堤』という言葉があります。このいわれを知っていますか。」とスクリーンに絵や風

景を映しながら、話してくださった。

「江戸時代の後半、このあたりに粕壁宿の名主をしていた見川喜蔵という人がいました。

天明三年（一七八三年）七月に信州の浅間山の大噴火によってこの粕壁にも火山灰が降りしきり、三十センチ近くも積もった所がありました。それによって、農作物がほとんどとれなくなり、食べるものや収入がなくなり多くの人々が苦しみました。それを見た喜蔵は、自分で裕福な人たちを熱心に説得して蓄えてある粟や稗などの食料を出してもらって、雑炊にして困っている人たちに分け与えました。また、火山の噴出物が川床にたまり浅くなったために、大雨や長雨では、堤防が切れ、洪水が村を襲いました。喜蔵は、氾濫から人や作物を守るために、自分の費用で古い土手の上に盛り土をして堤防を堅固なものにしていきました。その後の洪水の時にも私財を投じて堤防の上にさらに土俵を築いて、下流の土地を水害から救いました。こういったことで人々は感謝を込めてこの堤を『喜蔵堤』と呼ぶようになりました。」

（ぼくたちの住む春日部にもそんな災害があったのか、そして、その時もみんなでできることから何かを始めて支え合ってきたのか。）聡の頭の中は東日本大震災で活躍する地元の人々、全国、世界からのボランティアの人々の姿と喜蔵をはじめ災害を乗りこえた春日部の人々の姿とが重なって見えてきた。

先生は、「私たちのふるさとの『喜蔵堤』からみなさんが学ぶことは何ですか。」とみんなに問いかけられた。そして、少し残る喜蔵堤の映像を放映してくださった。（あれっ。ぼくたちがいつもランニングしているところじゃないか！）とびっくりした。

（そうか、あの小道にはそんないわれがあったのか。）聡は、改めて苦難を乗り越えて助け合いながら生きてきた人々の思いに触れたような気がした。昔も今も大切なことは共通しているな、聡の頭の中にあった（どんなふうに考えたらいいのか。）という疑問は春風に消えていくような気がした。そして、それは日頃の生活でも大切なことだと思えてきた。

二日目のゴミ拾い。喜蔵堤を率先してゴミを拾う聡にすれ違うおじさんが「ゴミ拾い、ありがとう。」と声をかけてくれた。聡は喜蔵さんに言われたような感じがしてうれしかった。ゆったりと流れる川と木々の若葉の小道が春の日差しに包まれていた。